

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：陳岡めぐみ

論文題目：絵画のための「イメージ戦略」－絵画蒐集・取引との関係から見た 19 世紀フランスの複製エッチング

陳岡めぐみの博士学位請求論文、「絵画のための「イメージ戦略」－絵画蒐集・取引との関係から見た 19 世紀フランスの複製エッチング」は、西洋近代美術史研究において見過ごされていた複製エッチングに新たな光を当て、その歴史的意義を「アカデミック・システム」から「画商・批評家システム」への転換という絵画受容の歴史的な文脈の中で解明した独創性あふれる学問的成果である。

本研究は何よりもその着眼点と問題設定が優れている。従来のモダニズムの美術史観に囚われることなく、受容の観点という最新の流れを押し進め、油彩画や創作版画と比べてマイナーなジャンルと見なされていた複製エッチングを敢えて研究対象に取り上げた。しかも、画商・批評家・雑誌創刊者など多彩な顔を持つ絵画プロモーターであるベルギー人レオン・ゴシェに焦点を当てながら、1870 年代パリの美術市場において 17 世紀オランダ・フランドル絵画が大きく再評価される際に、いかに複製版画が重要な機能を果たしたのかを綿密かつスリリングに論証して見せたのである。その手法はきわめて手堅い実証的なもので、ゴシェ関係資料の発掘、サロン（官展）のカタログや高級美術雑誌、展覧会カタログ、競売カタログ（かつ競売原簿）、所蔵品カタログなど、19 世紀当時の一次資料の徹底的な調査に基づいている。こうして複製エッチングによる横断的なイメージのネットワークを詳細に跡づけた上で、社会史的、メディア論的な視点をも加味して、絵画作品の市場価値が創出されていく過程、人為的な操作によって趣味や流行が形成されていく様相をリアルに浮き彫りにしたのである。ミクロな資料調査とマクロな歴史分析を柔軟に接続したところに、本研究の見事な達成がある。

本論文は本文篇、図版・資料篇の 2 分冊から成る。本文篇は 2 部構成で全 7 章、および序章と結びから成る。図版・資料篇の方は図版に加え、巻末付録としてサロンのカタログと四つの競売カタログ、美術雑誌『ガゼット・デ・ボザール』と『ルール』に掲載された複製エッチングのリスト、並びに文献目録と人名索引が付加されている。以下、論文の構成に即して議論を紹介し、審査委員からの指摘を記しておく。

序論において著者は、近代版画史や複製技術史の先行研究に言及しながら、その周縁部に置かれていた 19 世紀フランスの複製エッチングを、同時代の絵画蒐集・取引に関わる新たな美術流通システムの形成と結びつけて研究する意義を主張し、自らの問題意識を鮮明に提示する。第 1 部は、19 世紀の複製エッチングをめぐる全般的な事象と時代背景を扱う。複製エッチングの隆盛期である 1870 年代のサロンのカタログ調査に基づく第 1 章では、ブルジョワ・コレクターを標的にした画商が批評家と連携しながら高級美術雑誌を舞台に審美性、学術性を付与された複製版画を用いて絵画のプロモートを行う状況が生まれていたことが、デュラン＝リュエル画廊や『ガゼッ

ト・デ・ボザール』誌を例に述べられる。続く第2章は、再現性と解釈のはざまにある複製エッチングの美的、造形的特質についての興味深い考察を示す。ただし、写真や石版画との比較分析が単純に過ぎるとの指摘が審査員から出された。第3章では、ドゥーブル・コレクションと批評家トレ＝ビュルガーのフェルメール・キャンペーンのつながりというゴシエに先行する個別事例を、複製版画に付加された紋章型エクスムゼオの意味という観点からの的確に探っている。

本論の中心となる第2部は、美術愛好家であり投機家であるレオン・ゴシエが、画商として作品を売買し、批評家としてまた雑誌『ラール』の刊行者として作品をプロモートする中で複製エッチングの果たした役割を総合的に論じており、各章とも充実した成果となっている。ベルギー王立美術館に残る未発表資料を基にゴシエの全体像を素描し、そのイメージ戦略の大筋を説明した第4章に続き、第5章ではニューヨークのメトロポリタン美術館創立当初における17世紀オランダを中心とする絵画コレクションの形成と版画集出版にゴシエが深く関わっていたことが論じられる。国境を越えた絵画市場を意識し、寄贈も含めて美術館に巧みな売り込みをかけ、版画家ジュール・ジャックマールによる複製エッチング集で価値を高めていく過程の記述は圧巻である。さらに第6章では、ブルジョワ・コレクターたちと投機集団を形成し、1870年代パリの重要な競売を偽名も使いつつ操作した中心人物がゴシエであり、それらの競売カタログにも、同時期の雑誌紹介記事にも複製版画が効果的に導入されていることを説得的に示している。ただし、人間関係や偽名の使用が複雑なため、人物相関図がほしいとの注文が審査員からは出た。最後の第7章は、ゴシエが創刊した高級美術雑誌『ラール』の意義を、当時の反アカデミックな美術行政や産業応用芸術振興の動きまで視野に入れて解明しようとする。『ラール』自体の調査は貴重な貢献だが、背景の掘り下げが不十分なためやや息切れの感があり、今後課題を残した。むしろ、『ラール』を支持する実業家コレクターを代表するロスチャイルド家のメセナ活動の代理人をゴシエが務めた点から、問題をさらに深めていくことが期待される。結論では、風景画や色彩表現への時代の嗜好にも合致し、芸術と技術の中間的位置にあった複製エッチングこそが、新しい絵画流通システムの形成期において最適の媒体であったことを改めて確認している。

全般的に見ると、これまで日の当たらなかった19世紀フランスの複製エッチングを本格的な美術史研究の対象とし、絵画市場および価値付けのネットワークの成立とからめて重層的にその意義を論じた画期的な功績を評価する点で、審査員全員の判断は一致した。とりわけ、徹底した資料探索と文脈の再構築、ゴシエという重要人物の新たな発掘、異なるメディアにまたがるイメージ網をつきとめたその手腕、さらには高度な専門性を帯びつつも明快で開かれた叙述の仕方が高く評価された。細部においては不用意な断定や適切でない表現、誤字等が散見すると指摘もあったが、それらは瑕疵に過ぎず、本論文の学問的寄与を大きく損ねるものではないことが確認された。

以上の審査の後、審査員全員による協議の結果、全員一致で本審査委員会は、陳岡めぐみの提出論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。